題名：「空間相対名詞の意味論・統語論的特徴―日本語と韓国語の対照」

要旨：

本研究の目的は、日本語の空間相対名詞「前」「東」と、それに対応すると思われる韓国語の空間相対名詞 *aph, tong* とを比較対照し、生じうる解釈の多義性の違いや統語論的環境の違いを論じることである。空間相対名詞とはそれ自体では意味が充足せず、修飾要素をとって空間関係を表す語をいう。本研究で主眼とするのは、以下のような現象である。

(1) 車の前にパトカーがとまっている。　　＜車の前の空間を表す基準点用法＞

(2) 車の前にキズがついている。　　＜車の前の部分を表す部分用法＞

例のように空間相対名詞「前」を含む「車の前」は同形式でありながら、文脈により車の前の空間を表す解釈(1)と車の前の部分を表す解釈(2) という多義性が生じる。本研究では前者の解釈を車を基準点と捉えそこからの方向を表している「基準点用法」、後者の解釈を車を構造体と捉え内部構造に言及している「部分用法」とよぶ。一方、韓国語 *aph* を用いると(1)(2)に対応する例は以下のようになる。韓国語表記は Yale 方式を用いる。

(3) cha aph-ey kyengchal cha-ka se iss-ta.「車の前にパトカーがとまっている」＜基準点用法＞

(4) cha (ka) aph { ＊φ /-pwupwun }-ey khun sonsang-i iss-ta.

「車の前にキズがついている」＜部分用法 / φは対応する要素がないことを表す＞

基準点用法である(3)では日本語と同様 *cha aph* を用いるのに対し、部分用法である(4)では車の前部分を示すのに *cha aph* のみでは解釈ができず、*-pwupwun* を必要とすることが分かる。このことから韓国語では部分用法すなわち物体の部分を指す時は *-pwupwun* でそれを明示するという制約が日本語に比べて強い傾向にあるといえ、一見同じ意味をもつようにみえる「前」と *aph* でも部分用法の解釈をとる場合のふるまいが異なるといえる。(*ka* は任意の主題要素である。) 続いて日本語「東」と韓国語 *tong* を比較する。

(5) 彼はパリの東に別荘をもっている。　　＜基準点用法 / 部分用法＞

(6) ku-nun phali tong{＊φ/-ccok}-ey pyelcang-ul kaci ko-iss-ta.　＜基準点用法 ＞ 部分用法＞

(7) ku-nun phali tong{＊φ/ccok-pwupwun}-ey pyelcang-ul kaci ko-iss-ta.　　＜部分用法＞

この場合日本語では「東」は自由形態素として用いられさらに「パリの東」で「基準点用法(例えばパリの外のシャンパーニュ地方) / 部分用法(例えばパリの中のパリ市第 20 区)」の両方の解釈が可能であるのに対し、韓国語 *tong* は(3)の *cha aph* のように自由形態素として用いることができない。加えて、共起する要素 *-ccok*「～の方・側」, *-ccok pwupwun*「～の方の部分」の性質により「基準点用法 / 部分用法」の選好性が異なることがわかる。

以上のように、日本語の「前」「東」と韓国語の *aph, tong* は一見意味的に対応するようにみえるが、*tong* が単独で用いられないという統語的特徴や、「基準点用法 / 部分用法」の解釈の可 /不可またその解釈を可能とする場合の条件が異なることが提示できる。このように空間相対名詞の生起環境や「基準点用法 / 部分用法」に注目しこれらの性質を細かに記述することは、日韓の言語対照だけでなく、言語教育やより深い言語理解、さらには日本語、韓国語以外の言語との類型論的記述にも寄与するものであると考えられる。